

氏名	劉 小妹	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 6287 号	
学位授与の日付	令和 2 年 9 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	近代日本語における名詞の文法化についての研究 —従属接続詞化を中心に—	
学位論文審査委員	教授 宮崎 和人	教授 栗林 裕
	准教授 京 健治	准教授 堤 良一

学位論文内容の要旨

日本語には、「私は家業を手伝うかたわら、ボランティア活動に参加した」「出かけようとした矢先に、客が来た」の「かたわら」「矢先」のように、連体形式を受け、従属節を構成する一種の機能語が存在する。これらの単語は、名詞の文法化によって成立したものである。本研究では、こうした機能語を「従属接続詞」として品詞体系の中に位置づける立場をとる。従属接続詞という品詞を認める研究者はまだ少なく、その体系的・組織的な記述もまだ十分には行われていない。また、文法化のプロセスについての解明もあまり進んでいない。本研究では、従属接続詞の記述的研究を日本語の文法研究の重要課題の一つと考え、特に、近代語におけるその使用状況を考察することを目的とする。資料には近代語コーパス（国立国語研究所）を用い、全体的な使用状況といくつかの個別の語彙について、以下のような考察を行った。

第一章では、『太陽コーパス』を利用して収集した 67 語の従属接続詞の用例（25601 例）を対象として、文体、格形式、動詞述語のテンス・アスペクト形式の面から調査を行い、近代における従属接続詞の使用状況の全体像を明らかにした。

第二章以下では、近代語において従属接続詞の用法をもちながら、空間や時間を表す名詞から文法化したいくつかの形式をピックアップし、『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』を利用して収集した用例の調査にもとづき、それぞれの語の用法の全体像を視野に入れつつ、文法化の状況について考察した。

第二章では「かたわら」、第三章では「いっぽう」を取り上げ、両者の関係についても考察した。近代語コーパスの「かたわら」は、名詞用法が全体の約 54% を占め、実質語としての使用がまだ衰えていない。現代語にはない副詞用法が全体の約 26% を占め、従属接続詞化して使われるものは全

体の約 11%に留まるが、当時すでに現代語と同様のはだか格をとる従属接続詞用法は完全に成立していた。現代語の「かたわら」に見られる「主な活動・作業以外の空いた時間に、一方で」という意味を表す例は近代語コーパスにも数多く見られる。ただし、「母が編み物をするかたわらで、女の子は折り紙をして遊んでいた」のような空間的な意味を残した従属接続詞の用例は存在しない。そのほか、二つの状況を対比的に捉える用法が広く見られる点に特徴がある。この用法では、動詞の過去形が見られたり、主節と従属節が異主体になったりする。つまり、現代語なら「一方で」を用いるようなところに「かたわら」が用いられていたと考えられる。

近代語の「いっぽう」も名詞としての使用が衰えておらず、約 40%を占める。従属接続詞の用例は全体の約 3%にすぎず、副詞用法が約 40%を占める。現代語では、「いっぽう」の名詞用法が衰え、従属接続詞、接続詞、副詞の用法が増えている (BCCWJ の調査による)。近代語では、従属接続詞用法の「いっぽう」は、名詞として状況語に使用されるときと同様に二格をとり、「方面」という意味を保っていて、文法化の程度はまだ低い。

近代語から現代語への推移において、いち早く現代語と同じ用法を確立したものの、その後、衰退の一途をたどる「かたわら」に対して、近代では従属接続詞としては劣勢であった「いっぽう」が文法化を進めながらそれに入れ替わっていったと考えられる。

第四章では、「早朝」の意味を表す時間名詞から「接触的同時性」を表す従属接続詞への文法化の事例として、「あかつき」を取り上げた。近代コーパスを調査した結果、「あかつき」は、実質語としての「早朝」の意味を喪失し、連体的な成分をとることが必須となり、主節と従属節の同時関係を表す用法が成立し、この用法では文体的な制約からの解放も進んでいることが観察された。ただし、「あかつき」の接続する動詞の述語形式について見ると、現代語では動詞の述語形式はシタ形式に固定されているのに対し、近代語ではスル形や否定形のほか、推量形なども見られ、述語形式の固定化の度合いは低かったことがわかる。次に、格・とりたて形式の面から見ると、現代語では従属接続詞としての「あかつき」の形式はほぼ「～には」に固定化されているが、近代語でもすでに二格が中心である。ただし、非常に多くの取り立てのバリエーションが見られる。また、「あかつき」が接続する動詞述語の出来事のタイプ（望ましき）については、現代語ではほぼ望ましいものに限定されているが、近代語では望ましくない例も少なくない。以上のことから、近代語においては、「あかつき」の文法化はまだ途上であったと考えられる。

第五章では、近代における「すえ」「はて」の従属接続詞用法について考察を行った。前章で取り上げた「あかつき」が接触的同時性を表すのに対して、これらは継起性を表す。これらも文法化によってできた形式であるが、「あかつき」が当時はまだ文法化の途上にあり、形式的にも意味的にも安定していないのに対して、これらは早期に文法化を完成させ、「すえ」は現代語とほぼ同じようになっている。「はて」はすでに衰退しはじめており、「末路」のような意味で使用されることが多い。「はてに」の代わりに「すえに」を、「はてには」の代わりに「あかつきには」を使うこともできたようである。

最後に、「結論」として、本研究が明らかにしたことをまとめ、理論面と記述面にわたって、今後の課題を提示した。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、近代以降の文法学説の発展過程の中に従属接続詞の認識が生じてくる経緯を明らかにすることから考察を始め、従属接続詞を研究対象に据えて、現代語との比較も視野に入れつつ、文法化の観点から、近代日本語の共時態におけるその実像を、雑誌を収録したコーパスの大規模な調査によって明らかにしようとしたものである。

考察のために使用した資料は、国立国語研究所が構築し、公開されている近代語コーパスである。本論部分は、『太陽』における 67 語の従属接続詞の用例（25601 例）を対象として行った、文体、格形式、動詞述語のテンス・アスペクト形式に関する総合調査（第一章）と、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』を対象として行った、「かたわら」「一方」「あかつき」「はて」「すえ」といった個別語彙の近代における従属接続詞への文法化の状況に関する考察（第二章～第五章）とからなる。

序論部分には、文法論において従属接続詞がどのように捉えられ、品詞として認定されるに至ったかの研究史が素描されている。現代語の研究においても従属接続詞という品詞を認める研究者はまだ少ないが、従属接続詞化が名詞の文法化の一つの重要なルートであるとの前提に立って考察を展開している。なお、従属接続詞の定義については、村木新次郎氏の定義に概ね従っているが、村木氏が基本的に名詞用法が衰退し従属接続詞に変わってしまった単語を品詞としての従属接続詞と見ているのに対して、本論文では、従属接続詞化の途上においては名詞用法と従属接続詞用法が共存するのが通常であることから、品詞としてではなく、名詞の一用法としての従属接続詞用法を対象としているということになる。

本論文を評価するうえでまず注目されるのが、研究手法における実証性である。用例の収集にあたっては、いきなりコーパスを検索するのではなく、目視による手拾いから始め、リスト化した後に検索を行っている。これによりコーパス中の従属接続詞を網羅的に収集し、全用例をデータベース化した後に調査と考察に取りかかっている。データベースの構築には膨大な時間と労力を要し、さらに文語で書かれた用例の一例一例に検討を加えており、論証にあたっては、すべて数値化されたデータを根拠としている。記述においては多角的に事実を捉えており、結論にも飛躍がない。

次に注目されるのが、事実を相対化しようとする姿勢である。近代語の共時態を見ながらも、申請者の頭には常に現代語への道筋が思い描かれている。しかも、単純に近代語から現代語へと進化するとは考えてはおらず、固定化や衰退というケースのあることを明らかにしている。これに関して、第三章では、「かたわら」の用法の特徴を丹念に記述するだけでなく、「いっぽう」の用法の記述をそこに重ね合わせることによって、近代語から現代語に至る過程で両者の関係が反転したとする、非常に興味深い指摘を行っている。すなわち、「いっぽう」の文法化が不十分な近代においては、文法化が先行していた「かたわら」が同時関係を表す従属接続詞としては優勢であり、現代語の「いっぽう」と似た用法でも使われていたが、「かたわら」の用法が固定化していくのに伴い、劣勢だった「いっぽう」が優勢に転じたというのである。「あかつき」もまた、「かたわら」と同じように、

近代において従属接続詞の用法を確立させていたが、用法の固定化（特殊化）とともに、同時性を表す従属接続詞としては衰退していくという見方をとっている。「すえ」と「はて」を比較して後者の方が衰退が早いこと、当時、「はてに」の代わりに「すえに」を、「はてには」の代わりに「あかつきには」を使うこともできたということの指摘も大変興味深い。

本論文の不十分な点としては、総論と各論のつながりがよくないこと、数多くの表によって調査結果を提示しているが、解説が十分になされていない場合があること、文法化について説明した章を設けるべきであることなどが指摘された。そうした問題はあるが、従来ほとんど手がつけられていない領域に果敢に取り組み、膨大なデータを駆使して、時間をかけて丁寧に言語事実を拾い上げ、明示的な結果を残したことは、この分野の研究への大きな貢献となり、高く評価できることから、審査委員全員一致で、学位授与にふさわしいという結論に達した。